

評価・提案テーマ		①健康・長寿	
事業名	①-1 福祉拠点整備事業(居場所づくり)	担当部署	保健福祉部・長寿介護課・高齢者支援室
市の取組への評価・課題		具体的な対応策・提案	
<p><b>【評価○】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>開催場所は少ないが、開催回数が多いことから、現在開設されている場所が有効活用されていることは評価ができる。</li> <li>「居場所づくり」の取組は素晴らしい。高齢者の心と体の健康づくり、特に身近なコミュニケーションづくりは高齢者の皆さまにとって生活の充実という点ではプラスになる。</li> <li>老人(独居含む)がコミュニケーションの場を得る機会を創出する仕組みは素晴らしい。</li> <li>平成11年からの地道な保健師活動もあり、要介護認定が全国平均を下回っていることは評価に値する。</li> <li>設定した数値目標を着実にトレースしている。</li> </ul>		<p><b>■高齢者と学生等による世代間交流</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>現在、高齢者が主体となり、「居場所」の開設・運営を行っているが、企画・運営を学生などの若者と協働で行うことにより、異世代間での交流に繋げ、継続した活動が可能となるのではないかと。また、学生が単位が取れる仕組みがあればなお良い。</li> <li>各「居場所」に定期的に都留文科大学の学生、小学生や保育園児との交流する機会を設け、事業の充実度の向上、参加者の偏りを低減させたらどうか。</li> <li>保健師の手助けをしてくれる保健委員さんのような方たちを養成し、常時開設している町の喫茶店や保健室を「居場所」として設ける。男性に店長やウェイターになってもらったり、手作り用品を販売したり、子どもや親も立ち寄れる、多世代交流の場ができるのではないかと。</li> </ul> <p><b>■住民ボランティアの構築</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全国的にはカフェが効果をあげているが、保健師を助けるような保健委員のような住民ボランティアを隣近所同士をつくり、高齢者の声掛けをしたらどうか。</li> </ul> <p><b>■活動披露のための居場所合同イベントの企画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年に1回～2回等、各「居場所」参加者が一同に集う催し物を企画し、それぞれの活動内容を披露し合うことにより“やる気”が出て、更なる継続性が出るのではないかと。また統一感を醸成し、市の取り組みを広くPRできるのではないかと。</li> <li>男性の方には、女性複数出迎えに行くとか、「夫婦の日」や「男の会」と言った限定イベントを企画したらどうか。</li> <li>高齢者は昔話をするのが好きという傾向があると思うので、「昔話、自慢話大会」などというイベントをやり、生い立ちや仕事、趣味、自慢話、苦労話等、持ち時間を与えて、話し手・聞き手を順番にやっていただいたらどうか。</li> <li>これから高齢者の仲間入りをする予備世代の男性の意見を聞いてみることもよい。このように試行錯誤を続けながら長期的に良い「居場所」を運営していくことが重要である。</li> </ul> <p><b>■各地の事例発表会の開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>成功事例や参加者の感想など情報を共有することにより、仲間を増やし、更なる活性化が生まれるのではないかと。また、人が増えることによりマンネリ感が薄れ、活性化に繋がれるのではないかと。</li> <li>KPIの設定根拠と実績、整備補助金の詳細な内訳、意見交換会での参加者の感想や意見を定期的に公開し、事業費効果の中間管理・検証を強化したらどうか。</li> </ul> <p><b>■社会的な役割を担う仕事の依頼</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>趣味のものだけではなく、社会貢献度の高い、自分が社会に役立っていることが実感できる活動を含めていくことで、男性の参加率も上がるのではないかと。</li> <li>不法投棄防止を訴える看板に利用するキャッチコピーを考えてもらうコンテストを開催する等、行政の仕事に絡めて行政の取り組みと一緒に取り組んでもらうのはどうか。また、自治会や団体が行う清掃活動への参加・協力依頼をしたらどうか。</li> </ul> <p><b>■空き家の活用</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>市の商店街のあちこちにシャッター通りが見受けられるが、空き店舗の活用も考えられる。また、空家等がスーパーの近くにあれば、足腰が痛くても車で買い物ついでに寄れるのではないかと。</li> </ul>	
<p><b>【評価△】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>参加が中断された人等に対して、自宅訪問することにより理由等を聞いて対応すべきだと思う。</li> <li>「居場所」の開設・運営が高齢者主体となっているため、各事業内容(講演、体操、カラオケ等)に温度差、マンネリ化により参加者が偏る傾向があるのではないかと。</li> </ul>		<p><b>コーディネーターによる意見のまとめ</b></p> <p><b>■人材育成</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>居場所づくり事業(健康ポイント制度も含む)は、市の保健師をはじめ職員の数には限界があるため、手助けをするボランティア等を育成する必要がある。</li> </ul> <p><b>■男性が参加し易いプログラム開発</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>居場所づくり事業には男性が参加しにくい状況があるため、「社会貢献」などに関するもの等、男性が参加し易いプログラム(仕組み)が必要である。そのためには既に参加していたり、意欲的な男性の分析が必要である。</li> </ul> <p><b>■大学生の活用</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>市内には都留文科大学や健康科学大学があるので、大学生の若い力を活用するとともに、大学生の利益になるような枠組み作りを開発する必要がある。</li> </ul> <p><b>■居場所づくり事業と健康ポイント事業の連携</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>この二つの事業を絡めて運用し、高齢者の居場所づくりを活用し、健康ポイント事業に巻き込めるようなスキーム作りが必要である。</li> </ul>	
<p><b>【課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>機会提供を前提に考えると都留市内全ての自治会で開催できると理想的である。</li> <li>補助金執行額や用途に差があり、どのような「居場所」運営がなされているか見えてこない部分がある。</li> <li>不参加者が参加したくなる取り組みが必要である。</li> <li>KPIの見直しが必要か。開設場所に比較して人数と回数の達成率が高い。要支援1・2の人、ハイリスクの人に対して、ポピュレーションとしてどのくらいのカバー率だと効果が期待できるかを検討したらどうか。</li> <li>外出頻度は平成22年と比較して微増しており、居場所づくりは外出のきっかけとしては有効だが、開催頻度から考えると、介護予防につなげるには工夫が必要だと考える。</li> <li>男性の参加者が少ないことと、地域のリーダーが高齢者なことも課題である。また、男性の参加者が特に外に出ない状況を改善するには、高齢者自らの主体に委ねては進展は限定的であると考え。しかし、あまり目的、目標を持たせすぎると、負担に感じてしまう高齢者への配慮も必要か。</li> <li>外出を控えている理由の一位が足腰の痛みという結果から考えると、「居場所」が近くでないと参加が難しいことが挙げられる。</li> </ul>			

事業名	①-2 健康ポイント制度導入事業	担当部署	保健福祉部・長寿介護課・高齢者支援室
<p>市の取組への評価・課題</p>	<p><b>【評価〇】</b>                      ・ポイントが付与されることや保健師等専門家の指導のもとで目標を設定できることから、健康づくりの意欲や向上を図ることができることは評価できる。</p> <p>・「居場所」への参加等運動だけではなく、健康習慣の実践にも、ポイントが付与されることは良いことと評価できる。</p> <p>・健康を目的に運動を行う誘因を作り、地域の店舗で使えるポイントが貯まり、買い物で地域も潤うというスキームは非常に美しいと感じる。</p>	<p>具体的な対応策・提案</p>	<p>コーディネーターによる意見のまとめ</p>
	<p><b>【課題】</b>                      ・健康ポイント手帳の登録は、保健師4名体制で500名の登録をされたことは非常に素晴らしい。しかし、保健師だけでは限界があるので、自治会長、民生員、商店街の方、公募の市民などを養成しないと対応に限外があるのではないのか。</p> <p>・KPIの目標値が実数で4,200人であるとする、カバー率50%は、そもそも目標値として高すぎるか。</p> <p>・地域行事等に参加する人は、既に意欲のある方や健康である人が多いと思うので、そういった場に顔を見せない人こそ、健康ポイント制度が普及すればよいと考える。</p> <p>・「健康ポイント制度」や制度利用によるメリット(わくわくカードへのポイント付与等)の周知が弱く感じる。また特典がわくわくカードだけでは、メリットが少なく感じる。</p> <p>・付与したわくわくポイントがどのくらい利用され、地域に貢献されたか検証した方がよいのではないか。</p> <p>・元々意欲でない、高齢者にどう普及を図るかがポイントと思われる。意欲的に活用できる高齢者とそうでない高齢者の間で大きな不均衡が生じるが、だからといって無理を強いると長く続かなくなる。また、ポイントを付与することによって、買い物ができるのも意欲的な一部の高齢者に偏ってしまわないか懸念される。</p>		